

ISSN : 1341-6189

特定非営利活動法人 日本医学図書館協会主催 日本薬学図書館協議会協賛

# 第13回医学図書館研究会・継続教育コース プログラム・予稿集

期 日 : 平成18年11月8日(水)～10日(金)

会 場 : 東北大学金属材料研究所 講堂

# 第13回医学図書館研究会・継続教育コース

「ライフラインとしての学術情報 誰もが使える医学図書館へ」

期 日 : 平成18年11月8日(水)～10日(金)

会 場 : 東北大学金属材料研究所 講堂

特定非営利活動法人 日本医学図書館協会主催 日本薬学図書館協議会協賛

## 第13回医学図書館研究会・継続教育コース開催にあたって

学術図書や学術雑誌といった学術情報は、教育・研究活動の進展を支える上で極めて重要な役割を担う学術研究のインフラ（基盤）であり、もはや、ライフラインと呼ぶに相応しいものとなっています。

学術情報基盤の整備・充実は医学・薬学に限らず教育・研究活動を遂行する上で最大の重大事となっていると同時に、図書館はその中核を成す施設であることは図書館職員誰もが認識しているところであります。

今日の図書館は、電子ジャーナルに代表される電子情報とインターネットの普及により、多様化し増大する各種情報を利用者に効果的、効率的に提供し、また必要とされる情報関連のサービスを組織として行うことが重要となっており、こうした電子情報と紙媒体を融合した「ハイブリッド・ライブラリ」の実現が強く求められる時代になっています。

また、これからの図書館は、学生や教職員に限らず、地域の医療従事者や患者様等、誰もが利用しやすい図書館に生まれ変わり、地域を支える情報拠点となることが求められています。特に、大学図書館には、このような社会貢献活動を通じて人材養成に貢献し、一層の研究活動を促進し、活性化するという知のサイクルが求められています。

このような環境変化に対応し、学術情報基盤として学術研究活動を支え続けるためには、毎年繰り返される図書や雑誌の値上がり、図書購入財源の確保、学術情報の電子化等々、図書館が抱える数々の諸課題を解決していく必要があります。

また、図書館が地域の情報拠点となるために、広報や連携の在り方等についても改善していく必要があります。

今回はじめて、東北地区が開催館となり「ライフラインとしての学術情報 誰もが使える医学図書館へ」をテーマに開催することになりました。この機会を通じて、医学図書館が抱える様々な課題の解決に向けて、あるいは改善に向けて多少なりとも役立つものとなれば幸いです。

特定非営利活動法人日本医学図書館協会主催・日本薬学図書館協議会協賛

第13回医学図書館研究会・継続教育コース

実行委員長 熊谷 功

## 第13回医学図書館研究会

「ライフラインとしての学術情報 誰もが使える医学図書館へ」

期 日 : 平成18年11月8日(水)～9日(木)

会 場 : 東北大学金属材料研究所 講堂

## 第13回 医学図書館研究会プログラム

全体テーマ「ライフラインとしての学術情報 誰もが使える医学図書館へ」

11月8日(水)

12:30 受付

13:00 開会

13:15 ~ 14:40 発表1

13:20 ~ 13:40 1. 秋葉さおり(福島県立医科大学附属学術情報センター)  
福島県立医科大学の欧文雑誌選定  
電子ジャーナルの導入にあたって

13:40 ~ 14:00 2. 荒井邦子(東京慈恵会医科大学学術情報センター国領分館)  
看護図書館における選定図書

14:00 ~ 14:20 3. 江幡歌奈子(東邦大学医学メディアセンター)  
電子ジャーナルリストの作成と管理

14:20 ~ 14:40 4. 吉新裕昭(獨協医科大学図書館)  
リンクリゾルバの計画から導入まで  
獨協医科大学図書館の場合

14:40 ~ 14:50 休憩

14:50 ~ 15:35 発表2

14:55 ~ 15:15 5. 渡辺敦子(岩手医科大学附属図書館)  
メディカルオンラインの利用動向分析

15:15 ~ 15:35 6. 後藤敏行(非会員・青森中央短期大学)  
途上国への電子ジャーナル提供  
WHOのHINARIプロジェクトの最新動向

15:35 ~ 16:00 休憩

16:00 ~ 17:30 特別講演

講師：瀬名秀明氏(東北大学機械系特任教授・作家)

18:00 ~ 懇親会

11月9日(木)

9:00 受付

9:30 ~ 10:55 発表3

9:35 ~ 9:55 7. 山館優子(岩手医科大学附属図書館)  
岩手医科大学附属図書館のメールマガジンの発行と  
PR活動の経過報告

9:55 ~ 10:15 8. 對村絵美(愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター)  
ライフラインとしての学術情報を効果的に提供するための試み  
愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター業務委託の事例

10:15 ~ 10:35 9. 山室眞知子(JMLA個人会員)  
医学医療情報を必要とする人々へのサービス  
京都南病院図書室一般公開での利用状況

10:35 ~ 10:55 10. 坂内悟(独立行政法人科学技術振興機構)  
JDreamPetit利用者の検索行動から考察した一般市民の医療情報へのニーズ(仮題)

10:55 閉会

## 特別講演

# SENA Hideaki Profile

瀬名 秀明 (せな・ひであき)

1968年1月17日 静岡県生まれ 仙台市在住



### 【略歴】

1986年3月 静岡県立静岡高校卒業

1990年3月 東北大学薬学部卒業

1993年3月 東北大学大学院薬学研究科(修士課程)修了

1996年3月 東北大学大学院薬学研究科(博士課程)修了 薬学博士

### 【職歴および研究歴】

1990年4月～1991年3月 東北大学薬学部 文部技官

1996年4月～1997年3月 東北大学薬学部研究生

1997年4月～2000年3月 宮城大学看護学部講師

2006年1月～ 東北大学機械系特任教授

### 【所属団体】

日本薬学会、日本生化学会、日本癌学会、日本推理作家協会、日本文芸家協会、日本SF作家クラブほか

### 【作家業】

1995年 『パラサイト・イヴ』で第2回 日本ホラー小説大賞受賞

1997年 映画『パラサイト・イヴ』(監督:落合正幸、主演:三上博史、葉月里緒菜ほか)公開  
『BRAIN VALLEY』(上下)刊行

1998年 「神」に迫るサイエンス—BRAIN VALLEY 研究序説—(監修・共著)刊行  
プレイステーションゲーム「parasite eve」発売  
『BRAIN VALLEY』で第19回日本SF大賞受賞

1999年 講演録『岩波高校生セミナー8 小説と科学』刊行  
プレイステーションゲーム「parasite eve II」発売

2000年 『八月の博物館』、『ミトコンドリアと生きる』  
(日本医科大学・太田成男教授と共著)刊行

2001年 『ロボット21世紀』『虹の天象儀』刊行

2002年 『あしたのロボット』『ハートのタイムマシン!』、アンソロジー『贈る物語  
Wonder』刊行

2004年 編著『ロボット・オペラ』、対談集『科学の最前線で研究者は何を見ているのか』、  
共著『岩波講座ロボット学1 ロボット学創成』刊行  
その他、短編・ノンフィクション記事・文芸評論などの仕事がある。

---

瀬名秀明氏のホームページ: <http://www.senahideaki.com/>

# 福島県立医科大学の欧文雑誌選定 電子ジャーナルの導入にあたって

福島県立医科大学附属学術情報センター 秋葉 さおり

## はじめに

本学では平成17年から医学部欧文雑誌予算で電子ジャーナルを導入するため、平成16年に冊子体の見直しを含めたタイトル選定作業を行った。

## 選定の手順

平成16年4月の図書館委員会で選定のためのアンケート調査を同年5月に各講座に対し実施することが決定した。

### 1 調査内容

- (1) 大学として必要な「コアジャーナル」 - 前回平成12年に選定したコアジャーナル78誌のリストに必要なものを、不要なものを×と記入する。その他新規希望があれば記入する。
- (2) 講座で必要な雑誌 - 希望するタイトル10誌以内を順位付けしたうえ記入する。
- (3) 電子ジャーナル - (1)(2)のタイトルで電子ジャーナル購入を希望するものをつける。

### 2 選定作業

#### (1) 冊子体

- ・コアジャーナル - 回答の を1点、×をマイナス1点とし、得点の上位57誌が候補になった。
- ・講座で必要な雑誌 - 1(2)の希望1～3位までの雑誌が候補になった(コアジャーナルと重複するものは除く)
- ・コンソーシアムの参加条件である「継続義務」が発生する雑誌については優先的に購入する。

#### (2) 電子ジャーナル

講座の希望と予算とを勘案し、医図協コンソーシアム4社を候補とした。その他コアジャーナルのアンケート調査で高得点だった24誌については、電子ジャーナルも併せて利用できるようにするため、コンソーシアムに含まれなかったタイトルは冊子体セットで購入する案をまとめた。

これらの結果を図書館案として各講座に照会した。その後、回答を踏まえて最終的なリストを調整した。

## 選定の結果

平成16年9月の図書館委員会で電子ジャーナル727誌(当時)、冊子体179誌(78誌減)が決定した。電子ジャーナルには最優先で予算を充てることとなった。冊子体はコアジャーナルを【第1水準・57誌】、講座希望1位～2位及びコンソーシアム関連のものを【第2水準・86誌】、講座希望第3位のタイトルを【第3水準・36誌】とした。なお、予算が不足した場合を想定して第3水準のタイトルを順位付けし、下位のものから削減していくこととした。

## 今後の課題

タイトル数では電子ジャーナルが冊子体を上回ったが、購入額では冊子体が電子ジャーナルの3倍を占める結果となった。次回の選定では、より厳しい予算でタイトル数を確保することが求められることから、その選定方法については学内の意見、他館の状況を参考にしながら検討していくこととしたい。

## 看護図書館における選定図書

東京慈恵会医科大学 学術情報センター図書館 国領分館 荒井 邦子

### ．はじめに

東京慈恵会医科大学学術情報センター図書館国領分館（以下：当館）は、進学課程図書館が前身で、当時は医学部医学科1・2年生（240名）が主な利用対象者であり、基礎教育（物理・化学・生物）、一般教育（数学・語学・法学等）、教養書（文学・美術書）を収集していた。しかし医学科が6年一貫教育となり進学課程（教養課程）が廃止され、1年生100名が利用者になった。また、看護学科が同学部内に開設され、看護学生1～4年生約130名と、その教職員も利用対象者とする図書館に変わっていった。看護学科開設から10年以上を経て、時代や環境の変化とともに図書の選書範囲や基準の見直がせまれ、今回検討することになった。

### ．資料の選書範囲と選定ツール

当館の選書範囲は看護学科学生・教員の教育、研究支援に必要とする資料の収集（基礎看護・臨床看護）と、医学科1年生（看護学科学生も共通利用）の基礎・一般教育書、教養書（含辞典・参考図書）である。選定ツール・領域の基準は、教職員の推薦や出版社の目録・広告、講義要項・シラバス等から選定している。

### ．看護系図書の充実

看護学科開設当初は、一般的看護系図書を中心に収集していたが、教育内容や実習に対応できるよう、医学書各分野の基本図書、看護周辺領域の専門書（画像診断書や作業療法）など、選書範囲が広がった。それにより看護系図書が充実し、看護学科学生、教職員以外に隣接する本学附属病院の看護師や病院実習にきた医学科5・6年生などの利用が増加している。

### ．今後の蔵書構築に向けての課題として

看護師の卒後教育・研究の場としての図書館が利用されるようになってきたことから、これらにも対応できる資料収集の必要性も感じている。



## 電子ジャーナルリストの作成と管理

東邦大学医学メディアセンター 江幡 歌奈子

東邦大学メディアセンター（以下当センター）では、雑誌価格高騰への対応と2004年度までの組織目標「非来館型電子図書館の構築」より、電子媒体資料、特に電子ジャーナルの積極的導入を進めてきている。

当センターでは現在約4500タイトルを契約し、その他無料公開も含めて約5000タイトルを利用者に提供している。それらは利用者が利用可能なタイトルを簡単に探し出せるようにWWW上にタイトル順のオリジナルのリンクリストとして提供しているが、これを作成し、常に最新の状況で維持していくのは担当者として手間のかかる作業である。

当センターでは洋雑誌の担当者が片手間でこの作業を担当していることもあり、出来るだけ省力化し、且つ利用者にわかりやすく案内する工夫をしている。

省力化の工夫は

- ・元データリストは種類別（提供元別）に管理する。
- ・版元から提供されるタイトルリストはできるだけそのまま個別リストとして利用するなどである。

また、リスト作成には、身近なソフトウェアであるExcelとAccessを使っている。

- ・個別リストを纏めてWWW用リストを作成する手順はAccessでマクロ化しておく。

わかりやすい案内のための工夫としては

- ・更新情報は利用者・スタッフ双方に別にお知らせをし、スタッフ向け情報には利用案内の注意点なども追加する。
- ・リストの案内には色やアイコンを活用する。
- ・各提供元別の解釈表の作成をし、導入状況の説明、リモート利用の案内や使い方を解説する。

などに気をつけている。

実際の作業手順は画面例でご紹介する。

# リンクリゾルバの計画から導入まで 獨協医科大学図書館の場合

獨協医科大学図書館 吉新 裕昭

## はじめに

ここ数年、データベースとオンラインジャーナルをシームレスにリンクするリンクリゾルバが各社から発表され、導入する大学図書館が出てきている。獨協医科大学図書館（以下、当館）でも利用者の利便性において、検索から文献入手までの過程を容易にするため導入することになった。

「医学図書館」「情報の科学と技術」等の雑誌に技術的なことは書かれているが、「具体的にどのようにして導入すればよいのか」ということは紹介されていない。本発表では、当館がどのような過程を経て導入に至ったのか、事例報告を行う。

## これまでの経緯

当館では 1998 年秋頃から電子ジャーナルを導入し、全て手作業で 1 誌ずつ登録し、管理を行っていた。ただし、ホームページで公開はしておらず、図書館にて ID・パスワードを印刷した紙をファイルし、製本に出されているときの代替品として利用者に提供していた。2000 年度から予算化し、ProQuest のパッケージを契約、これに伴いホームページでリストを公開し、利用者に提供する形となった。2004 年度から A-to-Z (EBSCO 社) を導入し、オンラインジャーナルの管理を行い、2006 年度には LinkSource (同社) を導入し、データベースからフルテキストへのシームレスなリンクを実現した。

## 導入にあたって

当館では時間的な制約から、国内での導入実績のある 3 つの製品を比較検討する対象として挙げた。導入にあたり、当館の内部委員会である機械化検討委員会で検討、3 つのポイントとして「使い勝手（利用者）」「管理面（図書館）」「価格」を中心に製品の比較を行った。比較にはパンフレット等資料・リンクリゾルバについて書かれた論文を参考にした他、無料トライアルにて実際に動いている様子を精査した。導入製品決定後、NLM が提供している PubMed（無料で公開）と Ovid 社が提供している Medline・CINAHL（本学で契約）に設定を行った。この 2 つのデータベースでは、PubMed の設定が契約型のものと違い、登録のために NLM と直接メールのやりとりをする必要がある。

ここでは、どのようにしてこの製品を選択・決定したのか、導入までに必要な設定の方法、宣伝するためにとった方法等を報告する。

## 今後の課題

学内だより（本学の学内報）、ホームページ、パンフレットによる宣伝の他、カウンター対応時、図書館主催の講習会等で説明しているが、まだまだ宣伝不足である。今後はそれ以外の方法でもアピールしていかなければ周知されないのかもしれない。

また、当館では現在のところ Web で OPAC を公開していないため、オンラインジャーナルで利用できなくても冊子を所蔵している場合には、見落とされてしまう可能性がある。更に、所蔵がない場合、この流れの中で文献取り寄せの申込を行うことができない。この 2 点からリンクリゾルバを導入した効果は多少薄れてしまうと考えられる。

LinkSource の機能的な問題点として、Moving Wall（例：SD Web edition で最新 12 ヶ月分のみ利用可能なタイトル）未対応、統計機能なし、フリーのパッケージ（HighWire 以外）は直接論文へのリンクが形成されない、日本語表記のパッケージがない、等が挙げられる。

## メディカルオンラインの利用動向分析

岩手医科大学附属図書館 渡辺 敦子

【背景】 本学では、メディカルオンラインを 2005 年 7 月から正式導入したが、当初は利用数が少なくフリーアクセスプランの料金に見合わないことから、利用数アップを図るために、図書館ホームページに収載誌のリンクリストを掲載するなど広報活動を工夫してきた。その後の医中誌 Web とのリンク形成の影響もあり、現在、利用件数は増加の傾向にある。

【目的】 利用雑誌を分析することで、メディカルオンラインの有効な利用の普及を図るための広報を考える一助とする。

【方法】 毎月の利用統計の分析

本学所蔵資料の利用頻度：利用データから本学所蔵分を抽出し、全体との比率を測る  
利用雑誌の分野別傾向：メディカルオンラインの 14 分類に振り分け、傾向を見る  
時間帯別の利用状況：図書館の開館時・閉館時に分けて利用状況を見る

【結果】 医中誌 Web とのリンクが形成される前後では、利用者層に大きく違いがあるため、医中誌 Ver.4 が公開された 2006 年 2 月 21 日を境にした集計も行った。利用数のうち本学所蔵資料の割合を見ると、医中誌 Web とのリンク後は常に半数以上が所蔵資料である。時間帯別に見ても、利用雑誌のうち所蔵資料が占める割合は、開館時と閉館時で変わりがないことが分かった。利用頻度の高い分野は臨床系であり、また利用雑誌の雑誌名順では上位に医学総合が多く入っており、配信誌の分野別比とは一致していない。

【考察】 今後、キャンパスの分離や書庫の保管場所不足などから、雑誌は和洋ともできるだけ電子ジャーナルでの提供に切り替えたいが、メディカルオンラインの契約価格は、前年利用実績に基づいて翌年の契約価格が決まるというものなので、いかに有効な利用法を啓蒙するかが大きな課題である。メディカルオンラインのサイトにアクセスする前に、利用上の注意を記載したページで「冊子体優先」を明記しているが、分析の結果から医中誌 Web とのリンクでの利用が多く、冊子体優先が周知されていないことが分かった。まず OPAC で所蔵確認をして、緊急時・製本時以外は冊子体を優先して利用するという模範利用の効果的な広報の工夫をしなければならない。

## 途上国への電子ジャーナル提供 WHO の HINARI プロジェクトの最新動向

青森中央短期大学 後藤 敏行

本発表のねらいは、医療情報の格差是正に大きな貢献をしている WHO の HINARI プロジェクトを紹介および分析することにある。

デジタルデバイド、あるいは情報格差という言葉が広く使われるようになって久しい。格差のひとつに、先進国と途上国間の医療情報に関するものがある。例えば、途上国の医療関係者にとって国際雑誌の入手は非常に困難な場合が多い。低所得国では研究機関の半数以上が有料雑誌を 1 冊も購入していない、という調査結果が出たほどである。

HINARI (Health InterNetwork Access to Research Initiative) はそうした医療情報の格差是正に多大な貢献をしているプロジェクトである。手短かに述べればそれは、世界保健機関 (WHO) の運営の下、生医学や関連分野の雑誌を途上国の研究機関へ出版社がオンラインで無料 (または非常に低廉な価格で) 提供し、それによって途上国の健康増進に貢献する、というものである。

2001 年の開始以降、HINARI の規模は順調に拡大している。当初、HINARI は一人当たり GNP が 1,000 ドル未満の国々 (69 カ国) の非営利研究機関へ、医学雑誌の 6 大出版社 (Blackwell, Elsevier Science, Harcourt Worldwide STM Group, Springer Verlag, John Wiley, Wolters Kluwer International Health&Science) が約 1,500 タイトルの雑誌を無料提供するものであった。それが 2006 年 9 月現在、参加出版社数 80、雑誌タイトル数 3,300、登録機関数 2,000 (2003 年から、一人当たり GNP1,000 ~ 3,000 ドルの国の機関も対象に含まれている。それらの機関に対しては有料: 年間 1,000 ドル) 以上にまで拡大し、これを生医学分野の雑誌コレクションと考えたとき、世界最大規模と言えるまでに成長している。論文の年間ダウンロード数は 350 万件以上に上る。

そうした HINARI に対して、現在までのところ、先進国と途上国の間にある医療情報の格差を是正するものとして評価する声が多い。しかし、課題も存在する。まず、HINARI によって途上国の人々の健康が実際に増進したということを立証することが困難である、という点を挙げなければならない。たしかに、途上国の研究機関がアクセス可能な医療情報が HINARI によって増えたことは明らかである。だが、そのことが実際の健康状態の改善につながっているというデータを示すことは、なかなか難しいようである。また、多くの途上国ではインターネット環境が不十分である、電子化されていない古典的な医学の教科書は利用できない、といった問題も指摘されている。

HINARI の長期展望を見直すための評価が 2005 年末から進行中である。非常に大規模となり、途上国への貢献度が高いプロジェクトだけに、近い将来に立ち消えになってしまうことは考えにくい。まだまだ多いと言われる未登録機関や未参加出版社を取り込み、今後どれほどプロジェクトが成長するか、上に述べた課題はその過程でどのように克服されるのか、動向を見守りたい。

# 岩手医科大学附属図書館メールマガジンの発行と PR 活動の経過報告

岩手医科大学附属図書館 山館 優子

## 【背景】

2004 年 8 月から岩手医科大学附属図書館メールマガジン(=以後、当館メルマガ)の発行を開始した。配信開始のきっかけは、より多くの利用者に図書館のことを広く理解してもらうこと、館員のインサービストレーニング、そして館員ひとりひとりが司書としてのモチベーションを高めることを目的とし開始した。

## 【経過】

当初、メルマガは月 1 回程度の発行を目安に、編集の担当も数名でスタートさせた。その後、館内で編集担当者グループが発足し、さらに多くの館員が携われるよう話題も広げ、一定の分野に偏らないように工夫した。

発行当初からの課題である読者登録の伸び悩みを解消すべくさまざまな PR も試みた。まず、図書館 HP と館内へメルマガを掲示、「図書館新着資料案内」の送付を希望している利用者へメールで発行開始を知らせる等の PR をした。その後、学内各講座、部署へのチラシの配布、新年度の学生用ガイダンスでメルマガ配信を紹介するなど、読者登録への増加 PR を試みた。また、講座へ配布する図書推薦依頼文書に「配信希望」の欄を設けて登録者を募るなど手法を変えて取り組んだ。更に現在、学内向けメルマガの浸透状況を調査するアンケートを実施中である。

## 【結果】

当初は毎号のテーマも決めず、思いつきの状態での発行開始だったが発行から二年経過し、徐々に館内でも理解され編集・執筆を担当するメンバーも増えていった。

読者登録増加に向けての活動では、口頭、チラシ、HP でのアナウンスでは大きな効果は得られなかった。現在行っている学内利用者に対してのアンケート結果も参考にし、今後どのように進めていくべきか解決の糸口としたい。

## 【考察】

今後、読者登録増加にむけて PR 活動を活発にするとともに、内容についてもこれから十分に吟味し、メルマガのさらなる発展を目指したい。

# ライフラインとしての学術情報を効果的に提供するための試み 愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター 業務委託の事例

カムイ（株） 對村 絵美

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター 委託スタッフ

## 1. はじめに

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターにおいて、平成17年度からそれまで派遣だった形態を変更し、図書館業務の委託が開始され一年半が経過した。現在、センター長を含む5名の専任職員とともに、5名の委託スタッフが、主に情報提供業務（閲覧業務、相互貸借業務、図書・雑誌の受入・整理など）を担当している。薬学部増設に伴う図書館サービスの多様化に対応するために開始された業務委託であるが、この一年半で、図書館サービスにどのような変化があったのかを具体的な取り組みを紹介しながら、委託スタッフから報告したい。誰もが使える医学図書館を目指した業務委託スタッフの実践報告である。

## 2. 委託スタッフによる取り組み

### 現場の声の積極的発信

業務を行なう上で気付いた問題点は、スタッフ内でまず検討し、改善策を考える。その後、専任職員へ改善策を提案している。改善策が承認され実現化されたものは数多くある。

以下に、実際に提案し実現した例をいくつか挙げる。

- ・データベースを簡単に使えるよう、独自のマニュアルを作成し、利用者に配布。
- ・雑誌目録のデジタル化、分類の細分化、不明図書に関する処理のマニュアル化、図書館と分室の相互利用サービスの実施、新着図書コーナーの設置、返却トラックの設置、修理本のOPACへの反映など。

### ノウハウの蓄積

- ・情報提供業務のマニュアルを作成。随時更新。
- ・スタッフの誰が休んでも業務が滞らないように、各自の業務に幅を持たせている。

### 情報の共有

- ・委託スタッフ（5名）内で、情報を共有するために随時回覧を回している。
- ・スタッフの代表が、月一回程度行なわれる専任職員のミーティングに出席し、現状の報告や今後の予定などを確認している。

### 研究会等への参加

- ・図書館業務の知識を深めるため、年間を通して開催される、各研究会、勉強会、研修等にスタッフも出席させてもらっている。（出張費等は受託会社が支払う）

## 3. 今後の展望と課題

利用者が一番近い閲覧業務担当という立場から、利用者の要望にいち早く気付き、その声を図書館サービスに反映させるよう努めてきた。今後も、自ら考え行動し提案していくことで、使いやすい、利用者の立場に立った図書館作りに貢献していきたい。そのためには、専任職員側に委託スタッフからの意見を汲み取ろうとする姿勢が不可欠であり、委託スタッフ側も、常に自ら考え行動し、提案していく姿勢を維持していかななくてはならない。また、改善策を提案した結果、委託契約外の新しい仕事が増える場合があり、これにどう対処していくかが課題となる。

# 医学医療情報を必要とする人々へのサービス

## 京都南病院図書室一般公開での利用状況

京都南病院図書室 山室 眞知子

### 【背景】

ここ数年間に多くの病院や大学において医学情報の市民への公開として患者のための図書室、情報センターが設置されるようになった。またこのサービスをめぐってのシンポジウム、講演会も各地域で、また各団体・機関で開催されてその事例が報告されているが、そこでのサービスの対象はまだ患者とその家族の範囲にかぎられ、それ以外の利用者を対象とした医学情報のサービスに関する事例はまだ少ないようである。また、国公立の医学図書館をはじめ多くの図書館でも一般に公開されているが、まだ利用者は医学関係者に限られているところもあり関係者以外にはまだ利用しにくいのが現状のようである。一般の利用者には医学専門の資料は利用されないであろうということもその理由と考えられるので、当院の事例から利用された資料についての報告をしたい。

### 【調査目的とその結果】

当院では当初、患者とその家族の利用を目的として医学情報の提供を開始したが、その後 1997 年からは一般市民へもサービスを拡大して以来、医学専門資料を必要とする多くの一般の利用者は予想以上に多く、公共図書館や特に京都に多い文科系の大学・大学院の図書館からの紹介による学生・院生や企業の研究者からの利用者がみられた。公共図書館や文科系の大学図書館には医学関係の資料は少なく、大学の医学図書館は利用できないとか、敷居がたかく利用しにくいということであった。

これらの人びとの利用状況は、来室時に記入される「医学資料利用者票」と利用された資料の閲覧・複写統計を利用して調査を行っているが、その結果、利用される資料は医学一般から専門的なものと幅広く、とくに文科系学生からの利用は臨床心理学、心身医学、精神医学の関するものが多かった。

小規模な病院図書室における利用状況であるので、その事例の数は決して多くはないが、具体的にどのような資料が利用されてきたかを調査した結果を報告し、このことから専門的な医学情報を必要とする多くの利用者層のために大学の医学図書館にはもっと広く門戸を開いて利用しやすい環境を作っていただきたいと願う次第である。病院図書室は病気のための資料を必要とする利用者が中心となろうが、今後は一般の人びとが最も利用しやすい公共図書館との連携が必要と考える。

# JDreamPetit 利用者の検索行動から考察した一般市民の医療情報へのニーズ (仮題)

独立行政法人科学技術振興機構 情報提供部 坂内 悟

## 【はじめに】

米国においては、米国国立医学図書館(NLM)がMEDLINEを無料で公開しており、必要な医療や健康の情報は一般市民が自由に入手できる状況となっている。

日本の状況を見ると、健康や医療情報の利用は、医学関係者などの専門家を中心となっており、一般市民等の医療情報へのニーズは明確に把握されていない。そこで、独立行政法人科学技術振興機構(以下、JST)でサービスを行っているJDreamPetitの利用者へのアンケートや、サービス利用状況について分析を行い、一般市民と推定される個人利用者の医療や健康の情報へのニーズを考察した。直近1年間のデータ分析については、データ量が多く時間がかかることから、ここでは2ヶ月分のテーマ利用状況の分析結果を報告し、発表時に最新のデータで詳細な分析結果を報告する。

## 【分析の方法】

### 検索状況

2005年9月から2006年8月までの12ヶ月間を対象に、検索時のIPアドレス、検索対象ファイルについて、個人/個人以外の利用ごと、有料利用者/無料利用者ごとに分析を行った。

### 検索終了時のアンケート(任意)

検索終了時に無記名で任意に記入する形式で、随時行っており、2005年9月から2006年8月までの12ヶ月間を対象に分析した。

### テーマ利用状況

予め設定した114テーマおよび「医療と生活」カテゴリの32テーマを対象に、IPアドレス、テーマについて、個人/個人以外の利用ごとに分析を行った。

## 【検索状況の分析結果】

2005年9月から2006年8月までの12ヶ月間の検索状況の記録を集計し、分析した結果を報告する。医・薬系専門情報の利用は29.2%となっており、2004年開始当初の無料期間(8月~9月の2ヶ月間)の24.7%および有料サービス開始当初(同年11月の1ヶ月間)の24.5%と比較し、5%程度利用が増えている。各ファイルの検索回数等詳細については、発表時に報告する。

## 【アンケートの分析結果】

アンケートは、2005年9月から2006年8月までの12ヶ月間を集計し、分析した結果を前回の報告と比較し、発表時に報告する。有効回答数は199通。

## 【テーマ利用状況の分析結果】

2005年9月1日から2006年8月31日までの期間を集計・分析した結果については、発表時に報告することとし、ここでは2006年5月から2006年6月までの2ヶ月間についてのみ報告する。

アクセス元のIPアドレスが含まれたアクセス記録57,065件を分析した。アクセス元のドメインごとに予め設定したテーマへのアクセス数を調べ、100アクセス以上しているドメインからの36,622アクセス(期間内データの64.2%)を抜き出し、分析した。プロバイダと思われるドメイン名からのアクセスを個人からのアクセスと推定し、分析を行った。

・全体のアクセス数 36,622 アクセス

・個人と思われるアクセス数 21,414 アクセス 58.5%

・それ以外(検索サイト、企業、大学など) 15,208 アクセス 41.5%

個人と思われるアクセスの割合が58.5%とやや高い。全体で見ると、テーマをカテゴリ別に見ると、最もアクセスされているが、「医療と生活」カテゴリのテーマで41.4%となっている。個人と思われるアクセスを見ると、同じく「医療と生活」カテゴリのテーマで50.2%となっている。一般市民の医療関連情報への関心が高いと推定される。

## 【考察】

本稿では有料サービス後の最近1年間の検索状況、アンケートおよび、テーマ利用状況を基に、第11回医学図書館研究会・継続教育コース(JST報告)の状況と比較し、報告した。

一般市民の医療情報へのニーズの把握は、JDreamPetitサービスのアンケートや利用状況の分析だけでは、限られたニーズの把握であり十分ではなく、幅広い視点からの調査や分析が必要である。

日本における医・薬系専門情報の一般市民の利用は、徐々に増えつつあるものの、まだまだ、少ない状況である。様々な背景の違いがあり一概に米国同様とはならないが、医療や健康に関する一般市民の関心が今後もさらに高まり、今後、医療や健康の情報提供の必要性や重要性が社会的に認識されるよう、試行錯誤しつつ、医学・薬学図書館や公共図書館の司書の方々をはじめとする医療や健康情報にかかわる方々から状況をお聞きして、今後も活動を進めてゆきたい。



## 第 1 3 回継続教育コース

コース 1 : 「広報を考える もっと医学図書館を知ってもらおう」

コース 2 : 「利用者サービスを学ぶ ライフサイエンス情報の提供」

期 日 : 平成 1 8 年 1 1 月 9 日 ( 木 ) ~ 1 0 日 ( 金 )

会 場 : 東北大学金属材料研究所 講堂

## 第13回 継続教育コースプログラム

### コース1 「広報を考える もっと医学図書館を知ってもらおう」

11月9日(木)

12:30 受付

13:00 ~ 14:30 コース1(1)

講師：藤江俊彦氏

(千葉商科大学政策情報学部 / 大学院政策情報学研究科教授)

演題：「ソーシャル・リレーションズとしての図書館広報」

14:30 ~ 14:40 休憩

14:40 ~ 16:10 コース1(2)

講師：作野誠氏

(愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター事務長)

演題：利用者との関係づくりー医学図書館を知ってもらうためにー

16:10 修了証書授与

16:30 ~ 17:30 東北大学史料館見学

### コース2 「利用者サービスを学ぶ ライフサイエンス情報の提供」

11月10日(金)

9:00 受付

9:20 ~ 10:50 コース2(1)

講師：米澤誠氏

(東北大学附属図書館工学分館管理係長)

演題：図書館を中心とした情報リテラシー教育の構築

- 利用者サービス向上策としての情報リテラシー教育 -

10:50 ~ 11:00 休憩

11:00 ~ 12:30 コース2(2)

講師：竹内比呂也氏

(千葉大学文学部助教授)

演題：日本における学術情報流通・サービスの課題

- ILLデータの分析から見えること -

12:30 修了証書授与

## 「ソーシャル・リレーションズとしての図書館広報」

千葉商科大学/大学院教授 藤江 俊彦

時代が急速に変化する中で、非営利組織、公共的存在である図書館、とりわけ医学図書館のあり方や運営が問い直されている。それは利用者拡大のためのマスのプロモーションで解決できる問題ではなく、社会的使命（ミッション）や経営パラダイム（枠組み）の見直しまで包含しているといえる。

現代の状況的転換のトレンドの一つは、「知のあり方」いわば「学問のあり方」が閉ざされた個別科学から、開かれた超領域的科学にシフトしていることである。医学図書館は単に医学という専門分野の学術情報をストックし、利用者に受動的に提供するだけでなく、生活者市民のかかえる健康、医療、福祉、介護等課題の解決に役立つ情報、知識、便益等を能動的コミュニケーションでフローとして提供し、社会的価値を創造していかなければならない。利用者の生活文脈（コンテキスト）に関わるソリューションを支援する拠点となるわけである。

とすれば顕著なトレンドの二つ目は、需要者主導、利用者本位へのシフトである。経営（マネジメント）は利用者サイドのニーズを対話からつかみ、リレーションシップ（信頼関係）を構築し、リピーター利用者（ファン）になるよう働きかけるソーシャル・マーケティングが必要である。

医学図書館にとって大切なことは、一回毎の貸し出し作業ではなく、利用者との持続的リレーションシップを構築することである。利用者との間に、貸し出し前の広報から返却後のアフターカウンセリングまで、全プロセスでのコミュニケーションが重要となる。

パブリック・リレーションズは元来、“公衆”との良好な信頼関係（リレーションシップ）づくりのことである。しかしパブリック概念は近年変化してきた。かつて社会学者タルトは“公衆”とは「空間的に拡散し、マスメディアによって結ばれた群衆」としたが、今日デジタル・メディアが普及すると、サイバー上にもう一つのパブリック概念が生まれ、広範囲かつ曖昧化してきた。またパブリックはステークホルダー（関係者）と類義語的に解釈され、それらが重複したマルチステークホルダーを「社会」ととらえることが妥当性をもつようになった。そこで広報はパブリック・リレーションズというより、ソーシャル・リレーションズ（社会との信頼関係構築）として認識されるようになってきた。

邦語での「広報」も「広く報（し）らせる」ではなく「広く社会に報いる」と読むと本来の意味に近くなる。多様なステークホルダー（関係者）の重層的概念としての社会と相互作用、コミュニケーションすることで期待と規制による役割が生まれ、信頼関係（リレーションシップ）が構築されるのである。

医学図書館広報はソーシャル・リレーションズとして「研究（調べる）、学習（学ぶ）、楽しみ（楽しむ）」という新たなコンセプトによって、地域をベースに幅広く既存利用者の維持と、潜在利用者の掘り起こしのコミュニケーションを試みるべきであろう。メディアはアナログ（紙、電波、イベント等）とデジタル（PC、携帯等）を同一原理で混成化し、ハイブリッド・メディアによる戦略的展開によって利用者の抱く課題解決を支援するのである。近年デジタル・アーカイブやオープンミュージアムなど新しい試みも出てきている。やがて利用者がいつ、どこでも都合の良いときにアクセスできるユビキタスの環境整備も今後の課題となるであろう。

社会的には大量定年時代がはじまる。これが医学図書館にどのような機会をもたらすのか、将来の状況分析も怠ってはならない。

図書館経営を新たなパラダイムで再考し、使命を再定義し、そこからソーシャル・リレーションズとしての医学図書館広報を戦略的に立案、展開することがいま求められている。

# 利用者との関係づくり

## 医学図書館を知ってもらうために

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター 作野 誠

### 1. 知られていない図書館サービス

藤江俊彦教授の講演を踏まえて、医学図書館を知ってもらうための利用者との関係づくりについて検討したい。図書館の資源・サービスを利用者に活用してもらうには、図書館の持つ資源や提供するサービスを利用者に知ってもらう必要がある。京都南病院でも、医学専門書の公開が新聞に報道されたことによって、医学情報を必要としていた市民から、多くの問い合わせがあった事例が紹介されている<sup>1)</sup>。これは、図書館の広報活動が十分に機能していないことを示唆している。その結果、図書館を利用する人は必ずしも多いとはいえず、利用者に知られていない図書館サービス、認知されていないサービスが意外に多い。

### 2. 広報活動の目的

図書館における広報活動の目的は、下表のセル9の利用者である「図書館を好み、利用する」利用者を増やすことであるといえる<sup>2)</sup>。これからの図書館は、マス(大衆)としての利用者ではなく、パーソナル(個)としての利用者の要求に応じて行く必要がある。利用者に知られていない図書館サービスを利用者に知らせて利用してもらい、さらに満足度を上げる努力が必要である。そのために、先進的な図書館の広報事例と、愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターで取組んできた「意見箱」等による公聴活動とその結果の公開について紹介し、図書館経営戦略としての広報活動について考えてみたい。

		横 行動		
		行動 -	行動 0	行動 +
縦  認知	認知 -	Cell 1の利用者 図書館を好まず、他の施設を利用する。	Cell 2の利用者 図書館を好まず、利用しない。	Cell 3の利用者 図書館を好まないが、利用する。
	認知 0	Cell 4の利用者 図書館を知らないか、何の感情も持っていないかの何れかであり、他施設を利用する。	Cell 5の利用者 図書館を知らないか、何の感情も持っていないかの何れかであり、利用しない。	Cell 6の利用者 図書館を認知していないか、強い感情をもっていないかであるが、図書館を利用する。
	認知 +	Cell 7の利用者 図書館を好むが、他の施設を利用する。	Cell 8の利用者 図書館を好むが、利用しない。	Cell 9の利用者 図書館を好み、利用する。

[J.P.Peter&J.C.Olson, Consumer Behavior, 1987, P. 30, FIGURE 2 - 4を参考に作成]

注1)山室眞知子「患者と地域の人々への医学情報提供の実践、奈良岡功・山室眞知子・酒井由紀子『健康・医学情報を市民へ』日本医学図書館協会総会、平成16年、pp. 60-61。

注2)大島由起・作野誠「NDC9版移行に伴う書架分類と配架の工夫 - 愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターにおける教育と連携した学習支援の一環として - 」『私立大学図書館協会会報』126、p.229、私立大学図書館協会、平成18年9月。

## 図書館を中心とした情報リテラシー教育の構築 利用者サービス向上策としての情報リテラシー教育

東北大学附属図書館工学分館 米澤 誠

近年、多くの大学図書館で、情報リテラシーの教材作成やリテラシー授業への参画といった活動を展開しており、図書館は大学における学習支援の一翼の役割を果たしつつある。

しかし、それらの活動の中心となっている情報探索法は、情報リテラシーの一部分にすぎず、情報の評価からレポート作成における効果的な利用法までの総合的な学習支援を行わなければ、本来の目的を果たすことはできない。また学生も、情報探索法の価値と必要性についての認識を持つことができず、それらを学習する動機付けが弱くなってしまふ。

情報探索法の価値と必要性を強く認識させるためには、情報リテラシーのプロセス全体（情報探索から評価、活用まで）を視野に入れて説明する必要がある。具体的には、論文・レポート作成法との関係の中に、情報探索法を位置づけることが有効となる。

まず始めに、上手なレポートとはどのようなものであるかを示す。次いで、そのようなレポートを作成するには、どのような手順でどのような学習を行う必要があるかを説明する。（逆問題的手法による教授過程の再編成）

さらに、素材として利用する情報としては、検索エンジンから無料で入手できるウェブ情報もあるが、それ以上に有用な有料ウェブ情報資源や、ウェブでは利用できない図書館情報資源が多数存在することを説明する。ここまでの説明で多くの学生は、図書館資料を活用するための情報探索や情報源の選択が、学习上非常に重要であることに、十分理解を示すのである。（ウェブ情報資源の利用原則と情報資源全体像の提示）

情報リテラシー教育は、授業の中でも図書館の講習会としても行えるものであるが、図書館が学習や授業の中にとりこまれることにより、情報リテラシーがさらに効果的に習得されることは明らかである。自立的に問題解決を行う図書館中心の学習は、自主的な学習能力と能動的な学習行動を成長させる。そして、生涯活用できる変化に応じた探索術を身につけさせる。この発見型の学習は、学生にとって最も学習効果の高いものとなる。

大学図書館は、教員との連携によって図書館を中心とした情報リテラシー教育を展開し、より豊かな学習経験を得られるよう支援する必要がある。そしてそれにより学生は、生涯有用となる情報リテラシー能力（生涯学習力）を身に付けることができるのである。

われわれ図書館員は、図書館関係者以外の大学構成員に向けて意識的に、情報リテラシー教育の必要性和グッド・プラクティスを周知・広報する必要がある。そして、教員と大学教育の目的や図書館の有用性を共通認識とした上で、連携して図書館を中心とした情報リテラシー教育の構築を行うことが望まれるのである。

## 日本における学術情報流通・サービスの課題 ILL データの分析から見えてくること

千葉大学文学部 / 附属図書館ライブラリー・イノベーション・センター 竹内 比呂也

この講演では、科学研究費補助金基盤研究(B)「電子情報環境下における大学図書館機能の再検討」(研究代表者着土屋俊千葉大学教授、通称 REFORM)の枠内でなされた NACSIS-ILL のログデータ(1994-2005)の分析結果に基づいて、日本における学術情報流通およびサービスの課題について論じる。

よく知られているように、1970 年代以降の日本における学術情報整備の重点は、特に科学技術、生命科学分野で重要な外国雑誌を国内に保有し、効率的な ILL システムを運用することによって大学間の資源共有システムを構築することにあった。外国雑誌整備は 1977 年に始まる主題別拠点図書館(後の外国雑誌センター館)指定という形で実現し、1984 年に運用が開始された共同目録システム(NACSIS-CAT)によって形成される総合目録、および 1992 年に開始された NACSIS-ILL は、資源共有を支えるシステムとして今日に至っている。このような状況下で、NACSIS-ILL 参加館数も多くなり、日本の大学の 92%が参加するに至っている。

ILL によるサービスの実態を明らかにするために 1994 年から 2005 年までの NACSIS-ILL のログデータを分析したところ以下のようなことが明らかになった。

- 1) 現物貸借と複写の割合は、1994 年には 1:20 であったが、その後現物貸借の割合が増え 2005 年にはほぼ 1:10 になっている。しかし圧倒的に複写の占める割合が多い。
- 2) 1990 年代には、複写依頼の大部分が外国雑誌に掲載された論文に対してであったが、徐々に国内雑誌の占める割合が高くなり、2005 年度には和洋の割合が逆転した。
- 3) 外国雑誌に対する複写依頼の減少は、2002 年から始まった国立大学のコンソーシアム契約による各大学での外国雑誌利用可能タイトル数の増加の影響を受けている。
- 4) 充足率については、1994 年以来、極めて高い水準を維持している。
- 5) 所要日数は、年々短くなっている。
- 6) 国内雑誌のタイトルが依頼件数の多い上位 25 誌に現れるのは、2001 年度からである。それ以降は国内(和)雑誌タイトルが徐々に増え、2005 年度は上位 25 誌中 18 誌を占めるまでになっている。これらは看護や福祉の領域の雑誌である。
- 7) 外国雑誌センター館などの大規模館の複写受付件数の減少が見られる一方で、比較的小規模な、これまでは複写の供給源とはなっていなかった大学の受付件数の増加が見られる。

このような状況から、もともと紙の雑誌をベースに考えられていた資源共有システムと ILL システムが国内研究者の外国雑誌に対するニーズを満たすという政策的な目標を十分に果たしてきたことが明らかである。しかし 2002 年度以降に見られる外国雑誌の電子化とビッグディールによる利用可能タイトル数の増加が、大学図書館間の ILL の本質そのものを変容させたと言えよう。現在 ILL の上位を占める看護系国内雑誌の適切な整備が、日本の学術情報流通において大きな課題の一つになっていることも明白である。

第13回医学図書館研究会・継続教育コース プログラム・予稿集

平成18年10月 発行

編集・発行 第13回医学図書館研究会・継続教育コース実行委員会

事務局

〒980-8575 仙台市青葉区星陵町1-1 東北大学附属図書館医学分館  
TEL 022-717-7972 FAX 022-717-7982

実行委員会委員

熊谷 功	東北大学(実行委員長)
鈴木 啓一	東北大学(事務局)
工藤 弘文	弘前大学
小野 由美	青森県立保健大学
菅原 良子	岩手医科大学
原 智子	秋田大学
鈴木みち子	山形大学
関本由美子	福島県立医科大学
小林 克也	奥羽大学